



第 十 四 卷 第 三 號

子供といふもの

(フレネル會二月常會に於ける講演)

巖 谷 季 雄

釋迦に説法といふことが御座いますが、今日私が、皆さんの前で子供の事をお話するのは、まさしくそれであらうと思ひます、ふだん、専門に子供を取扱つて居らるゝ皆さんの前で私のやうなものがお話しするのは、甚だ嗚呼がましい事ではありますが、或は多少の御参考にならぬ事もあるまいかと思つて問題を「子供といふもの」として見ました。

世間の人は、よく一口に子供といひますが、實は子供位むづかしいものはないのです。私も今まで多少子供にふれて見ましたが、觸るれば觸れるほどわからなくなりませう。昔から、子供について書かれた書物も澤山ありますし、兒童心理なども随分研究せられて居りませうが、書物にはページに限りがある、子供には際限がないのですから、どんなに調べてもこれで究めつくしたといふ事は出来ないのです。一口に、子供といふものはかしいものだと云へませうし、子供といふものは愚なものだといふ人もありませうし、子供といふものは可愛いものだと云へば、子供といふものはうるさいものだと云へませう。

しかし之れを完全に、一言にいひつくす事はなかく困難です。あらゆる子供を短時日に究め盡すといふ事は到底むづかしいのですが、たい私が目に見、耳にふれて、多少氣のついた事をお話して見やうと思ひます。

先人も云つて居る通り、大人は子供から出来るので、大人のもとには子供であります。どんなに威張つても、生れながらにして、髭を撫で、居たのでもなければ、丸鬚に結つて初ぶ聲をあげたわけでもありません。私共大人のもとが子供であつたと同じく、私共の祖先も亦子供同様であつたのです。太古時代、即何千年か何萬年か以前の人間は恰度子供のやうな事をして居たのです。今日子供にして居る事は、恰度、その時代の有様をくりかへして居るのです。

子供の喜ぶお伽噺は太古の文學です、裸體で木の葉をまとうて居た時代の文學です。「名月を取つてくれろと泣く子哉」といふ一茶の名句がありま

すが、大人はそんな事は考へません。月は地球から何萬里も距つた所にある遊星の一つである位は、何人も心得て居るのですが、太古の人は、此の子供と同じく、大空に丸くきれいに光つて居る球は、何であらうかと怪んで、いろ／＼の想像を逞うして、或は捕れはしないだらうかなど、も考へたでせう。或は、お日様とお月様はいつでも駆けつくらをして居て、お月様は小さいものだからいつも追つかけてられてばかり居て、かわいさうにだん／＼瘦せて、しまいには消えてしまふなど、信じて居ました。子供はその時代の人、即我等の祖先の代表者であつて見れば、大に之を尊重すべきであらうと思ひます。今日世界の各國を見ても文明國では子供を貴んで居るが子供を粗末にして居る國はだん／＼衰微して居る。日本でも此二十年来、殊に十年來、子供によほど注意するやうになつて來て玩具なども、随分新しい工夫をしたのが見えるやうになつて來ました。文明國の中で

も、米國獨逸などの新進國が、特に子供に注意して居るやうであります。之に反して、支那や朝鮮などの下り坂の國では、あまり子供を大事にしない、支那などでは老人は非常に貴ぶのであるが、子供は決して大切にしないやうである。朝鮮などでは、子供を子供扱ひにしないのです。随分小學校などでは賢かしこさうな子供が居るのですが、子供の中から大人あつかひにする、即十二三歳になると大抵結婚させる、十五歳位でお父さん、二十四五歳で祖父さんといふやうな事になつて、人間自然の發達を遂げる事が出来ないのです。之に反して日本は滿州などの如く荒涼たる土地に於ても小學校幼稚園を設け、之に寄宿舎をそなへ、親切丁寧、その發育を助けて居ります。

次に、子供と云ふものは直覺的のものであるといふ事を申し上げたい、直に物がわかるのです。大人は己れの邪念に迷はされて、物の判断を過まる事があるが、子供は正直だから、明かに物を見わ

けます、親切さうでも猫かぶりばかりと看破する、こわい顔をして居ても、親切な人には直に懐なつきます。一寸見て、本能的にわかるのであつて、子供を見る大人の目よりも、大人を見る子供の目の方が、屢々公平で正確である。それをまちがつた大人の觀察を以て、正しい子供の判断を無視する事がある、子供といふものはわけのわからぬものだなど、云つて、大人の方がよほどわけのわからぬ事をして居る事があります。

子供が大人をだますなど、云ふ人もありますが、之は大人が子供にだまされるのです。大人が自分の了見で、子供を見をこなふのです。子供は大人をだましてやらうなど、云ふわるい考はないのですが、大人ほど言語に富んで居ないから、思つて居る事を極簡單にしか云はないので、之を大人がよい加減に推斷して、とんでもないまちがひを仕出かすのです。

子供と云ふものは、物にたとへれば鏡の様なも

のです。しかもきれいに磨いた鏡のやうなものです。何でもそのまゝそこへ映つるのです。それで「尊い寺は門から知れる」といふやうに、子供を見れば大抵その家庭の仕つけ方も、學校の風儀もわかります。そして、その映つたのが一時限でなく永久にのこつて居て、いろいろの時にあらはれる。大人がよく子供に小言をいふのですが、往々自分の影を捕へて罵つて居る事があるのです。たとへば、一日お父さんが、お尻をまくつて椽側に坐つて居たとする。之を見た子供の頭に、その姿がのこつて居て、他日その通りにやつて見る、忽ちお父さんのお目玉を頂戴するといふ順序になるのです。こんな事は形式の上の事ですが、往々大切な性質の上に好ましからぬ影響を來す事があります。「此の子は、男のくせに、氣ばかりもんでほんとうに神經質で困つてしまふ」など、いふお母さんが、實はいくらかヒステリーの、子供の前でもつも泣き言をいつてきかせたり、むやみに氣をも

んで見せたりして居る事があるのです。ですから大人が子供を叱るのは、寧ろ自分で自分の影を罵る様なものです。

それから子供と云ふ者は、多くの場合、現在主義で過去や未來の事は考へないものです。例へば顔を洗つたり、藥をのんだりする事をいやがりません。大人なれば、顔を洗へばきれいになるとか藥をのめば病氣が快くなるとか、未來に希望をもつて、當座の不愉快を忍びますが、子供は現在が不愉快ならば、他を顧みる餘裕はないのです。それですから、お伽噺をして聞かすのでも、記述的にするよりも、現在的にした方が子供は喜びます。話より繪の方を喜ぶ、繪は現在であるからです。それで子供に話をするにはなるべく繪によつて、或は繪を見るやうにするのが、最適切で有効です。

子供は、自由主義のもので、また樂天主義のものです。神經質などは異常なものです。世間とは没

交渉のもので、財政困難で、お父さんの額に八字が書かれて居ても、それには頓着なく「何か買つて下さい」とねだるのが普通です。それを「何です、これほど貧乏して居るものも知らないで！」など、叱りとばすのは子供の發育上甚だよろしくありません。世間から超然たる處が子供の價値であるから、之をみだりに打壊さないやうに注意する事が大切であります。子供の時分からあまり俗情に捕へられて、神經衰弱的に成人するなどは、國民性情の上から云つても面白くない事であるし、第一、子供の自然に反して居るのです。「武士は喰はねど高楊子」といふ事が子供に對してはあつてほしい、世間に對してはどうでもよいが、子供には、なるべく大きな事を云つて、心持ちを大きく育てたいと思ひます。

また、子供と云ふものは意志が強い、思ふ事は何でも貫徹しやうとします。それで駄々をこねる腕白をやるのですが、駄々や腕白は甚だもてない

「此子はほんとうに強情な子だ」とか、「仕方のない」とか云ふことになつてしまふ。大人の方から云へば、「しちやあいけない」といふ事を一度にしない子の方が便利なのですが、それはやはり子供の自然ではない。それを大人の方で、おとなしく／＼と無限におさへつけて矯めやうとすると、遂に意氣地のない偽善者のやうな人間を作りあげるやうな結果になる。大人の方で子供の意志の強い處を貴んで、妄に之を摧かなひやうにしたいものです。棟梁の材も若木の中に頭をおさへられると遂に盆栽に化し去るのです。

後に徳川三代將軍となつた竹千代は、なか／＼の腕白者でいろ／＼のいたづらをやるので、殆どもてあまされて居た。ある元旦の試筆に大きな紙を疊一ぱいにひろげて龍といふ字を書いた。ところがあまり大きくかいたのでしまいの點のうち所がなくなつた。どうするかと見て居ると、終りの筆をはねた勢猛に、疊の上にはぼたりと大きな黒點

をうつた。之を見て居た一人の家老が、これこそ徳川の礎はかたまるであらうと喜んだといふ話があります。小さな事に頓著なく己れの意志を貫いた處が面白いではありませんか。

一般の家庭でも、「それ障子をやぶいちやいけない」「それ襖にさわつちやあならない」とあまりこせつかぬやうにありたいものです。子供の將來を考へたならば、たゞきこわす障子位、別に作つておいてやつてもよい位だと思ひます。

子供といふものは多角形のもので、どの方面にも熾な意志で發展しやうとして居るものです。新奇な事を喜ぶと同時に、一方では、舊い習慣を好むものです。或は保守主義でもあり、また、進歩主義でもあるものです。お話でも舊い方を喜ぶ自分の方がよく覺えて居ても、やつぱり、あのお話をして頂戴といひます。好奇心が盛なと同時にかういふ保守的な處もあるのです。これが子供の性情の兩方面であるから一部分のみを見てはまち

がひます。お伽噺を作る時にも此兩面を考へなければなりません。あまり新らしい事はかりでは、子供の頭にわからなくなる。舊いばかりでは面白くなくなる。舊い處へ新らしみを加へるのが恰度よいのです。

次に子供と云ふものは馬のやうなものですと私はいひたい、馬が乗手をよく知ると同じやうに、子供は自分を扱ふ人をよく知つて居ます。また口はきかないが思つた通り正直に行にあらはします。大人は不正直だからうれしくなくても、時と場合によつてうれしさうな顔をして見たり、おもしろくない話でも感じたやうに聞いたりするが、子供は一切包みかくしはしない、何でも正直に表白するので、それをむやみに、頭から叱りつけるやうな事をするとう子供に悪る智慧を興へるやうな事になります。子供は清淨無垢な貴いものなのですから、なるべくその美しい處を破壊しないやうに注意したいと思ひます。

大人が子供を大人にしやうとするよりも、大人が子供にならう／＼とした方が、大人にとつても向上になるであらうと思ふ、また、その方が子供の爲めにも、大人の爲めにもなるのです。大人は己に汚れて居るが、子供はまだ清い者であるから清い物を汚さうとあせるよりも、子供に教へられて清められやうとする方がよい、大人は罪惡の塊かたまりであるからせめて子供に接して居る間、之に倣ならうて善人にたちかへるがよいと思ひます。この意味に於て、始終子供に接して居らるゝ皆さんは幸福であります。

くりかへして申しますが、子供は決して大人でないといふ事を忘れぬやうにしたい、これは至極見やすい事であつて、しかも往々忘却せらるゝ事です。即ち大人の頭で子供を判断しやうとしがちのものです。

私は、如何に子供を取扱ふべきかについて質問を受ける度に、「あなたは子供がおすきですか」と

反問すると同時に、「あなたは子供になれますか」と尋ねます。「子供は好きです」と答へる人は澤山ありますが、子供になるのはどうすればよいかわからぬ人も多くあります。自分が子供になつて子供を取扱ふでなくては、障子ごしに話をして居るやうなもので徹底しない事が多い、自ら子供になつてしまへば、直に子供に觸れる事が出来るから子供も喜んで之に懐なつかくのです。子供になるといふ事は必しもむづかしい事ではありません、赤ん坊に物を食べさせる時に「うま／＼ですよ」と、まづ己れの口をあいて、赤ん坊の口をあけさせる、あの呼吸でよいのです。自分の口をしつかり閉ぢて居て、いくら「お口をおあけ／＼」といつても無駄です。子供を取扱うて居らるゝ皆さんは必ず子供になり得る方々であらうと思ふ、少くとも、子供に接して居る間だけは、子供になつて、子供と共に遊んでいたいと思ひます。

獨逸のウイルデンブルグが「現世の樂園は子供

の社會なり」と云つて居りますが、これは名言と思ひます。どうぞ、皆さんは此楽しいお仲間の一人になつて、子供を扱ふて下さるやうにくりかへし御願ひいたします。

## 人類の子供時代は何故長いか

文學士 上野陽一

一  
原生動物のやうに、極簡単な動物になると、人間などに比べて見て、餘程趣きが違ふ。生れるといつても、母細胞が分割して二つになると、その二つが各獨立した生物になるに過ぎない。併し生物として存在して居る間に、少しも進歩とか發達とかいふ現象を見ることが出来ない。稍發達して

簡單なる神經系統を有するものでも、生れるとすぐに、自分のことだけは自分で世話をして、死に至るまで大した發達をしない。生れると同時に、

溺れるものを救ふには、自ら水中に飛び込まなくては、その効を奏する事は出来ないのであります。

種々の能力を具へて居るのであるから、始めから大人——動物に對して大人といふのも可笑しいが——として生れるのである。随つて子供といふ時代がない。先祖のやつて來たことを、反射的自動的にやつて行けるやうに、ちゃんと神經系統の方に準備が出來て居るのである。

併し今迄になかつた新しい境遇に順應して行くには、祖先の遺傳だけでは足りない。そこで個體の進歩といふことが必要になつて來る。今迄は祖先の遺傳を保存して行くための神經系統であつた